

2004年10月1日に毎日新聞に「2005年に遺伝子組み換え作物栽培」の報道があったから、その後、多くの方たちとお会いして、ほとんど無意味な意見交換をすることになった。毎日新聞の取材は報道の2日前、9月29日であった。昼食にジーンズスカンを食べながらたっぷり5時間ほど行なわれた。農業の話だけではなくススキノの話題になると、なぜか取材する側とそれを受ける側の緊張の糸が一気にほぐれるのは、なぜだろうと感じさせられる雰囲気ではあった。実はその時点では知らなかったが、地元テレビのメディアであるSTV（札幌テレビ放送）が北海道の組み換え作物の1時間番組を作るための取材中でもあった。STVは同じ長沼に住む金髪・ブルーアイのアメリカ人レイモンドから、私が新聞報道の6年前にも、組み換え大豆を栽培・出荷した情報を仕入れていたようで、新聞報道の前日には、現在は課長職で現場を仕切る元美人アナウンサーから「ミヤイさん、以前に組み換え大豆をやっていたんですね？」の会話から始まったが、私はてっきり毎日新聞から情報が漏れたかと思い「来年組み換え大豆、またやりたいんですよ」と電話口で言う「え！ 本当ですか？」とバックリとヨダレをたらしながら熱

い唇で食いついて来たのだ。そして新聞報道と同じ日の朝、6時からSTVのドサンコ・ワイド（番組名）では、**長沼で来年組み換え大豆栽培**と華々しく放送された。そのテレビをたまたま見ていた自分は「そんなことで、テレビの報道になるんだ」とまったく他人事の様であった。道路を挟んだ農場の事務所に向かう6時50分には、たまたま同級生の良い男だが独身の鎌田君が車で通りがかり、徐行しながら私に「これから大変なことになるぞ、でも応援するからな」と言っていたが、その時点でも自分自身に、その後、起きる大騒動を理解していなかった。

その日の午前中は、日頃から北海道の小農貧困モデルと北海道型共産主義を正しく説明していただける北海道新聞から、昼頃、取材に来るとの連絡があったのみで、普段と変わりなく麦後の緑肥処理に忙しかった。午後からはそれに加え、NHKが取材に来たくらいだった。

Vol.55 **政府の言うことが信用できるか！**



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

秋の北海道の日の入りは早い。夏至の頃には4時前からおてんとうさまが揚々と上がり始めるが、その分、秋から冬にかけては日照時間が極端に短くなる高緯度地帯である。そうなると17時には仕事を終え自宅できつろぐことになるが、突然のアポなし訪問者がやってきた。何事かと思ひ、ドアを開け顔を覗きこむと町役場の産業課の課長が困ったような、憤慨している様な

**オレにも
言わせる！**
**北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信**

雰囲気私に投げかけて来るではないか。

課長は単刀直入に「ミヤイさん、来年の組み換え大豆、やめてもらえませんか」とかなり深刻なトーンで話を始めた。「やめて」「いや、やる」など、30分ほどお互いの意見を言い放って、その日は終了したが、就寝前にやっことこの重大さを認識するに至った。とは言え、睡眠時間は日頃から最低8時間取ることになっている。目を閉じれば数分で、時には数秒で爆睡状態になるので、心配事があってもいつも楽しい夢を見ることが出来る。若い時分は、これからと言う時の時間が夜の9時を過ぎていて、わたしの両目はいつもしよぼしよぼであったので「私を取るのは? 睡眠を取るの?」と彼女たちから聞かれ「もちろん睡眠」と当然至極の答えをしたのだが、きつと彼女たちには何かとご不満だったことだろう。

国内流通作物は全て危険?

翌10月2日は土曜で官庁関係は休みなので、大豆を出荷している集荷業者の社長とJAながぬまに向かい、事実関係を話し、出来ることであれば組み換え大豆をやってみたい旨を尋ねたが、両者からは色よい回答は得られなかった。ただ、集荷業

者からはある程度の理解を得ることはできたと感じたが、地元のJAながぬまの幹部からは、さすが地元農業の模範たる姿を誇示するふんぞり返った、たいそう立派な御姿だけではなく、**小農根性の生産者の心**のより所ここにありといっただくことになった。

ちなみにJAながぬまには04年当時に私が作る大豆、小麦の出荷はない。本来であれば話をする必要もないのかもしれないが、やはり良識人として、現在の農協は地域農業の独占企業であるし、関係法に庇護された日本型共産主義モデル成功例の組織を無視することは良策とも思えず、結果的には事後報告になったが、将来のヒール・ミヤイの賛美を得る協力をする事になった。そのような会話が進行する中で妥協点を模索する提案があった。先ほどの町役場の課長さんから「事業推進会議に出てミヤイさんの意見を発言したら良いのでは」と言われたのだ。事業推進会議とは、町の産業課、JA、共済、土地改良区、出荷業者、消費者代表などが定期的に集まり地元長沼を發展させるための話し合いを行う場である。

私一人では淋しいので、補佐役として出席をお願いしたが、課長から

はオプザーバー、つまり発言をしないと言う条件でOKをいただき、10月15日の快晴の日に、事業推進会議が開催されることになった。当日までにわたしの補佐役はバイオの会社から1名と北海道大学から1名、来ていただけることになった。冒頭、私の来年の計画や組み換え作物の安全性について事実関係を数分話した後、各農業関係者からご意見をいただくことになったのだが、ある農業関係参加者から「**政府の言うことが信用できるか!**」と過激な発言をいただいた。彼はわたしの近くに住む良識人であるが、「HIVを見る、政府が安全と言ったって信用できない!」との論調である。

組み換え作物が流通を始めた1996年には政府による安全性試験で、安全性に関しては、既存の作物と同じであるとなった。まだ誤解している方たちもいる様だが、すべての組み換え作物が安全なのではなく、政府の審査を通った物のみ安心できると理解していいのだ。つまりこの日本政府による安全性試験を無視することは、既存の国内流通しているすべての作物は危険であると認めたことになることを理解しなければならぬし、元々ほとんどの作物が食品に利用される段階で加工適性等の試験はあっても、その既存の

作物のDNAが胃とおなじ酸度で分解されるかの試験等を行なった例を聞いたことがない。よくBtコーンを食べたら虫になるのか? と言う方たちがいるが、もしそうならノール賞物の大発明である。牛肉食べたら牛になるのか? コシヒカリ食べたら新潟人になるのか? そんなことを言い放つバカはどんなものを食べても死ぬまでバカであることもお知らせしておこう。私が決めたのではない。三つ子の魂……とわれわれの先人が決めたことである。文句があるなら、どうぞあなたの親たちと小学校の先生に言ってください。

不思議なことに地域の住民代表からは交雑・環境にどうの…の発言はあったが、安全性に関しての発言はなかった。当時のテレビ映像を見ると何か下を見て読み上げている様だ。誰がその書類を作ったのか?

長沼町か? たぶん北海道庁農政部だろう。当時、反対派のおばちゃんたちは安全性に関して好きなことを言っていたが、農政部はその発言に何のフォローもしなかった。このころから私の北海道農政部に対する信頼性が揺らいだことは間違いない。

TPOで使い分けることができる二枚舌のテクニクに酔いしれる道民に幸あれ。